
被災地の”現在の日常”をとらえた
写真作品制作プロジェクト

第1章 プロジェクトの概要

1. プロジェクトの名称

被災地の”現在の日常”をとらえた写真
作品制作プロジェクト

2. 代表者および構成員

・代表者

村田遼平 教科教育専攻
家政教育専修 2回生

・構成員

佐藤史菜 教科教育専攻
美術教育専修 2回生
圓口智子 教科教育専攻
家政教育専修 2回生
小西蒼 美術領域専攻 4回生

3. 助言教員

安江 勉 先生 (美術科)

4. プロジェクトの目的と内容

現在、美術の分野において写真という表現方法は重要な位置を占めており、その重要性はますます増していくと言われている。しかし美術教育という観点から見た場合、その他の分野に比べるとあまり扱われていないのが現状である。美術界における動きから考えてももちろん、美術教育が今まで以上に写真というメディアを扱うようになるということは明らかである。

しかし、写真というメディアが大衆化するにつれて、それ自身が一般化し、美術的要素の無い写真作品が多く存在することも事実である。もちろん、それらの写真にはその撮影者や園周辺の人にとって価値が有ることは間違いないが、そこには「美術としての」社会性や精神性といったものが意識

的に含まれていることは稀である。もちろん、それらの写真を作為的に作家が収集したり手を加えたりすることで二次的な意味をもたせるファインディングフォトの手法を採ることで、そういった価値を持たせることも可能ではあるが、今回はその行為に対する価値ではなく、一次的な作品としての価値について探求したい。そこで、今回のプロジェクトにおいては制作から展示を通して「美術作品としての写真」を制作することを目指した。

そこで写真というメディアについて考察したが、写真は記録性という価値を持っていることが重要であるという結論に至った。歴史を客観性を持って記録するということは写真というメディアの持つ大きなメリットである。ロラン・バルト (1974) も写真の本質を「それは=かつて=あった」ということであると、さらに「写真の本質はそこに写っているものの存在を批准する点にある」と述べている。この本質を活かしたモチーフの選定を行なうこととした。

このことから美術として価値のある写真作品を制作するにあたって、モチーフとして、2014年現在に撮り「それは=かつて=あった」ということを「批准する」価値のあるものを討議した。その結果、東日本大震災の被災地を撮るという結論に至った。東日本大震災から数年経ったが、震災直後の記録は多く残されている。しかし、当たり前前の事として時間は経ち復興へと向かっている。震災以外の事象でもそうであるが、あらゆる問題について考える際に時間の流れということは重要である。よって震災直後ではなく、現在の日常を撮影することにも重要な意味があると考えた。また、その作品の文脈をより明確にするために神戸と広島における撮影も行なうこととした。震災や原発の問題というものは現在進行形で起こっている問題で

あるが、それだけでなくその他の震災やヒロシマとしての出来事も現在の我々の日常に関係していることは明らかであるにも関わらず、そのことはなかなか意識することが難しい。過去から連続した時間の先にある現在ではなく、過去と現在という別のものとして捉えてしまいがちである。そこで写真を使って「時間の流れ」を意識することが出来る作品の制作することを目指した。どんな歴史的な出来事であっても、そこには日常が存在し、その日常の連続の結果が今の日常である。そのように考えると、どのような出来事に対しても無関係な人は存在しておらず、そのことを意識させるための作品を制作することを目的とし、その作品の展示を行った、

第2章 作品制作

1. 撮影—東北

宮城・福島での撮影は8月26日、27日に行った。ここでの制作では写真の持つ客観性を最大限に引き出す手法としてタイポロジー的手法でのアプローチを考えていた。被災した様々な建築物を客観的に同じ構図、同じ条件で撮影していくというものである。しかし、どの建物を撮影するかという選択の際に製作者の意図が多分に入り込むことが今回の制作の目的と大きく外れるのではないかと考えた。もちろん、写真を撮影するという行為において製作者の意識を介在させないということが難しいことは理解しているが、2日間という限られた日数で制作することを考えた場合、その作品数の中に占める被災した建築物の写真の数や、その被害程度が大きな意味を持ちすぎるとのではないかと考えた。分母を増やすことが難しいのでは制作意図と外れてしまうと考え、別の手法を用いることとした。

次に考えたのはニューカラー的手法で

ある。この手法がもたらす「客観的な視点」と「等価値」(ホンマタカシ, 2009) というイメージが今回の制作に非常に適していると感じたのである。実際に制作に入ってから、被災地の現状を限られた日数で撮影する上で最も適した手法であると実感した。しかし、この手法にこだわるのではなく、実際は様々な手法を織り交ぜて撮影した。上で述べたタイポロジー的撮影法も取り入れることもあった。撮影手法はタイポロジー的であっても、それが様々な手法で撮影した作品の中の1枚であった場合は、先程述べたような意味を持ちすぎることにはならないと考えたからである。一つの軸としてニューカラー的アプローチを持つことで、様々な手法を用いて撮影した作品も全てが等価値である、その中の1枚ということとして伝えることが出来ると思った。

2. 撮影—神戸

神戸での撮影は9月5日に行った。主な撮影場所として阪神大震災の際に被害が大きかった神戸市長田区と神戸港を選択した。しかし、作品の中にはその道中に撮影した作品も含まれている。それは、その作品を入れることで、今回の制作のテーマの1つである「時間の流れ」をより表現できると考えたからである。

撮影に関してはここでも宮城・福島と同じような手法を選択した。社会的意味としても震災からの復興のモデルケースの1つとしての選択であった神戸という撮影場所であったが、殺風景な様子が宮城・福島の様子と相通じるものがあり、同じ手法での撮影によって表現することで作品としての相乗効果があると思われた。

3. 撮影—広島

広島での撮影は11月28日、29日に

行った。広島の場合の設定に関しても、原子爆弾という被害を受けた街として、復興のモデルケースとして選択した。広島に関しては宮城・福島や神戸とは街の雰囲気が大きく違っていたため、撮影手法に多少の変化を加えた。今までと同様の撮影手法では、全てを合わせて展示した際に広島で撮影した作品だけ雰囲気が違うので統一性が失われると考えたからである。よって、ルーズに街を大きくとらえるような作品だけではなく、小さな部分にクローズアップを用いることで作品としての統一性を崩さないようにした。しかし「時間の流れ」に関しての表現は軸として残したままでの制作は心がけた。また、客観性も崩さないようにし、街の雰囲気を意図的に婉曲しないようにした。

4. 陶芸

また、当初の予定にはなかった陶芸作品も展示することとなった。これは、今回のプロジェクトの構成員の1人が美術において陶芸を専攻しているために、陶芸という表現手法を用いたほうが伝えたいことを伝えることが出来ると考えたからである。このことより、写真に拠る表現だけでなく表現の幅が広がり、展示における豊かさが増すのではないかと考えている。

第3章 結果

1. 展示

(1) 附属図書館における作品展示

12月10日～20日において作品展示を行った。展示場所として京都教育大学附属図書館の企画展示室を使用した。これは、今回の作品のモチーフから考え、できるだけ多くの人に見てもらいたいと考えたからである。大学内にはそれ以外にも展示スペースがあるが、様々な領域の人に見てもらえることと、展示空間としてのク

オリティーを兼ね備えていることを考えて企画展示室の使用を選択した。

「ただ、ひっそりと流れる」

e-Project 被災地の日常をとらえた写真作品制作 作品展



広島 (2014)

2014.12.10|水| - 12.20|土|

於 京都教育大学 附属図書館 企画展示室 西室

開館時間：9:00 - 21:00 (土曜日は17:00まで) 休館日：日曜日

図1 展示ポスター

(2) 展示形式

今回の展示においては写真の持つ物質性にも注目して展示を行いたいと考えた。写真というものは画像として平面上に時間を固定してしまう。特にPC等のモニターを通して見る機会が多く、時間による劣化が殆ど感じられない。そこで、写真が現像された紙の物質性にも目を向けることで、今回の作品制作の意図を反映する手立てを模索した。具体的には、作品を額に固定するのではなく、糸で吊るして、さらに配置に関しても一列に並べるのではなく群として広がりを持った配置で並べることで、その作品に写った対象物さえも、リアルタイムではないということを暗示したいと考えた。



図2 展示風景

2. 作品について

展示した作品に関しては、幾つかに分類することが出来る。

- ①画面の美しさより意味的な要素を重視したもの（意味型）
- ②意味的な要素よりも、画面構成の美しさを求めたもの（画面型）
- ③意味のあるモチーフと画面の美しさの両方で成立しているもの（理想型）

まず、①の意味型に関しては、今回の展示は美術に関して興味がない人にも見てもらいたいという思いから、内容が非常に伝わりやすいのではないかと思います、何点か展示作品に盛り込んだ。



図3 意味型の例1



図4 意味型の例2

例えば、図3は画面内にある文字が非常に意味を持っているし、図4はキャプションによって、この場が原爆の爆心地であることを示し、意味を持たせた。

次に②の画面型に関しては、美術作品である以上、画面的な美しさを持ったものを展示作品から外すのは、貴重な機会を逃す事になると思います、展示するに至った。今回の展示との意味は多少薄れてしまいが、作品自体の持つ力が充分にあるので、展示する意味があると考えた。

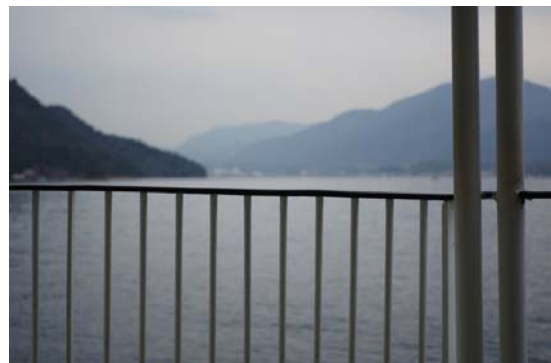


図5 画面型の例1



図6 画面型の例2

図5や図6は写真単体で見るとどこを撮影しているかが分からず、そのモチーフ自体も特別な意味を有していない。しかし被写界深度、明るさ、画面構成、色彩などの要素から構成される画面としては非常に完成されており、作品としての価値は高いと思われる。

③の理想型は作品の持つ意味と画面の美しさがバランスよく含まれている作品である。その名の通り、このような作品が理想であり、これに価する作品は多くの鑑賞者に訴えかけることが出来ると思い、展示を行った。



図7 理想形の例1

図7は神戸市長田区の復興後のシャッター街を撮影したものであるが、モチーフにも意味があり、画面構成的にも評価に価する。



図8 理想形の例2

図8は女川原子力発電所付近の送電線であり、画面的にもバランスが良く、鑑賞者の心を長い時間つかむことが出来ると思われる。

3. 結果および考察

今回の展示においては展示室にアンケート用紙を配置し、自由記述での感想を募った。

表1 意見および感想（抜粋）

神戸の写真がどれも心に響くものがありました。
災害や戦争、忘れずに立ち止まって考えることが大切だなと思いました。今の平和な日常に感謝です。
小さな驚きがいくつかあり面白かったです
広島の写真で何枚かとても気に入りました 静かにそこに立っているような気分になる写真でした
何気ない1ショットがまだ行ったことのない現地の空気を伝えてくれた気がします。
写真だから感じられるものがありました
写真の示す作者の思いが明確すぎて「ひっそりと流れる」時間的な出来事に鑑賞者が考えるスペースがないように思う。

アンケート用紙から見る鑑賞者の意見としては概ね良好であった。どこかの地域の写真に意見が偏らず、見る人によって共鳴する作品が違っていたのは作品展として評価できる点である。また、鑑賞者が作品と自分を関係させながら鑑賞できているというのは今回の作品制作における目的にも合うものであり、制作者の意図がうまく伝えることが出来たと言える。

しかし、反省点もいくつかある。アンケートにあった「作者の思いが明確すぎて」というのは上で述べた意味型の作品に対してだと考えられる。意味型の作品は、作者が鑑賞者に何を伝えたいかが明確になる反面、美術作品が持つ良さでもある、作品に対して思いを巡らせるという余地を奪ってしまう。このことが鑑賞者には押し付けがましく感じられたと想像できる。意味型の作品の展示は行わずに、画面型と理想形の作品だけで展示を行った方が展示としてはシンプルで、美術的な要素が多いものになったのではないかと思う。そういう意味では今回の展示は説明過多であったと言えるだろう。

また、展示形式に関しても反省点がある。指導教員から得た講評から、展示形式と作品が呼応していないという意見を得た。今回の展示方法に関しては 3.1.2 項で述べたが、展示方法に意味をもたせようとしすぎたため、主体である写真作品とのバランスが上手くとることが出来ていなかった。この点に関しても鑑賞者に情報を多く提示しすぎてしまったために、純粹に作品を鑑賞する際の障害になってしまった。

これらのことを踏まえて考えると、展示作品自体は高い評価を得ることが出来たが、その作品の選定や展示方法には反省点が残るという結果となった。この点に関しては今後の作品制作にも活かしていきたいと思う。

第4章 最後に

今回の展示を行なう際にその根底には、写真というメディアが美術において重要な位置にあるということを示したいという思いもあった。そして、実際に制作した写真作品は「思い出を残すための写真」でも「被災地の様子を伝える報道写真」でもない、「美術作品としての写真」になったと自負している。

また、美術というものは人の心を豊かにするものである。しかし、現代においては効率性などの観点から、ないがしろにされがちな分野でもある。しかし、今回は美術を通して社会性のあるメッセージを伝えることで、美術の持つ人の心を引きつける力が持つ意味を多少なりとも示せたのではないかと思う。

被災地の現状や今後どうあるべきかという問題に関しては、その回答を出すのが目的ではないので、本プロジェクトが鑑賞して下さった方々にとって改めて考える機会になったとしたら嬉しく思う。それと同時に、本プロジェクトを通して、美術という分野の豊かさや、写真というメディアの持つ可能性に少しでも気づいてもらえたら非常に嬉しく思う。

<参考・引用文献>

バルト, ロラン(1985)『明るい部屋』pp.93-94, 花輪光 訳, みすず書房

ホンマタカシ(2009)『たのしい写真 よい子のための写真教室』平凡社.

Shore, Stephen (1982) 『Uncommon Places: The Complete Works』 Thames & Hudson Ltd.

TILLMANS, WOLFGANG(2014) 『WOLFGANG TILLMANS』 美術出版社.

米田知子(2014)『After the Thaw 雪解けの後に』 赤々舎.